

二月の法話抄録

相縁生起

釋 法薫 担当

この世のすべての事柄は、必ず結果が出てくるものである。果なるものは願いから起る結果である。願いが強いから人として生まれてきたのである。また生きられるのである。

この法話が終わった後、ふと願いとは何かを考えていた。仏法とは、誰でもわけへだてなく、この世の中に必要とされて存在をしたことの証明であり、その一人一人の歩みの証明が、他の人の無明の闇を照らして、必ず目的が達せられることを伝えているのである。

仏法の中に、人間とひとの区別があつて良いのではないか。人間とは、いのちを互いにつなぎあふ相縁であり、山川草木、魚、肉、野菜など、すべてのいのちあるものと出せばよい。世間で言う人間は、衆生として仏法では言われている。その衆生たるいのちは、ひとにすべての願いを託すのである。「いただきます」と合掌をして、ささげられた、託された願

いをいただく。これは寿命なるものを感謝していただくのである。その寿命を食としてよくかみしめていただと、体が温かくなり、今日一日頑張ろうという気持ちになり、さらに、人のお役に立つために働く目的が生まれ、役に立てることの喜びがあふれ、さらにそれを維持し、発展させていこうという気持ちにつながる。これは食べ物だけでなく、お経という言葉の中に述べ伝えられている。お経は道路地図であり、どこにどういう風に人が成長していくのかが書いてある。したがって、お経という法の歩みに照らしあわせていけ

ば、山に自然に登れるのである。私達は、誰々がそう言ったから、偉いから、ついていくのではない。お金持ちの、社会で成功をした人が偉いので尊敬をし、まねをするのではない。法の人格をもっている。国の宝は建物や仏像ではない。一生涯一隅を照らして、ひっそりとまわりを法に導いていたひとが国宝である。ひとは、人間達からのちをささげられるに値するひとをいうのである。ひとなる言葉は、座談の中で、それぞれ言葉を発してください。

2月の法話会 ご感想
洪谷さま「目崎先生の教え子ですが、卒業して15年経つにつまずきや迷いが多く、まだまだだなあ、と感じています」
住職「一人でよく頑張ってきたけど、『一人ではない』ことを知るとよいですね。釈迦が出家した年齢に近づいて、迷いがあるのは当たり前」
井村さま「2月7日に無事に女兒の孫(紫帆ちゃん)が生まれました。忙しさの中で徐々に「私が、自分が」という気持ちが消えてゆけばいいな」と思っています」
酒井様、おめでとございました。

しんらんさまかるた

ひとびとの

こころにひろまる

おねんぶつ

親鸞さまが、越後(新潟県)から東国常陸(茨城県)に移られてから、お念仏のみ教えは



一帯に広まっていききました。聖人自らは教団を組織する意図はなかったようですが、その数は五万人とも十万人と

ぬいたかたなで
もいわれ、主なお弟子さんも四十八名の名が数えられています。

ぬいたかたなで

まちぶせる

親鸞さまが関東に住まわれた頃は、



祈りやまじないが流行していました。修験道の山伏弁円は、村人たちが聖人のもとへ集まるのを妬み、板敷山の頂上に護摩壇を設け、祈り殺そうとしたのですが果たせず、ついに刀を抜いて聖人の帰りを待ちぶせ

らんぼうな

べんねんも

おでしに

稲田に近い板敷山に、弁円という山伏が住んでいました。親鸞さまの教えが広まるにつれ、腹を立てた弁円は、親鸞さまを祈り殺そうとしました。しかし聖人の静か



笑みをたたえた暖かいまなざしに触れ、ついに刀を捨ててお弟子となり、名も明法房と改めました。

心に如来を思うとき